

タイトル	書評: 翟学偉 (朱安新・小嶋華津子: 編訳) 『現代中国の社会と行動原理 関係・面子・権力』
著者	伊藤, 昭男
引用	北海商科大学論集, 10(1): 53-58
発行日	2021-02-20

書評

翟学偉 (朱安新・小嶋華津子:編訳)

『現代中国の社会と行動原理—関係・面子・権力』

(岩波書店、2019年、309頁、6,050円)

(一) 本書の概要

本書はこれまで自明の理として理論的探求があまり進められてこなかった「中国人の社会および中国人の行動原理」について総体的な理論化を図ろうとした試みであり、中国社会の営みを支える法則を見出すことに目的がある。具体的目的は、筆者によると次の二つである。①欧米の社会科学における各種の理論と概念を用いて中国人や中国社会を把握するのではなく、自らの研究視座と理論的枠組みを作り上げることにより、既存の研究に挑むこと、②中国人が日常生活の中で常用する「関係」、「人情」、「面子」ならびに「権力」という概念を、新たな枠組みを構築する際の基本概念とすることにより、中国社会の営みを支えるメカニズムを経験的かつ合理的に認識する術を獲得すること(289頁より)。なお、本書は、著者の『人情、面子興権力的再生産』、『中国人的関係原理』(いずれも北京大学出版社)の著作より編訳者が一部を選んで再編集し、著者により日本語版として編集に際して必要な書き直しをおこなったものである。

(二) 本書の構成と内容概略

本書の構成は次のとおりである。

日本語版序

第一部

第一章 儒家の社会構築—中国社会研究の視座と方法

第二章 中国人と中国社会の文脈的理解に向けて

第二部

第一章 中国人の関係ネットワークにおける構造的均衡モデル

第二章 「報」の方向性

第三章 <関係>か、それとも社会関係資本か

第四章 中国人の<関係>のベクトル—インターネット社会がもたらす転換の可能性—

第三部

第一章 中国人の「大公平観」と営み—日本社会の「公私観」との比較において—

第二章 <人情>、<面子>と<権力>の再生産—「情理」社会における社会的交換—

第三章 中国の官僚の作法と技術—「偏正構造」と「顔[顔面]のはたらき」—

第四章 <関係>と<権力>—共同体から国家へ—

おわりに—変化し続ける中国をいかに理解するか

編訳者後記

また、序および各章の概略は以下のとおりである。

序では、中国において、中国人および中国社会に関する研究の蓄積がこれまで少なかったこと（これに関して顕著な研究を残した者として、アーサー・スミス、林悟堂、梁漱溟、費孝通、フランシス・シュー、ジョン・キング・フェアバンクをあげている）が述べられるとともに、多くの研究者が欧米の概念や理論を使うことが多く、中国の特色の把握にはどうしても齟齬が生じてしまうこと、総体的な研究に依らなければ把握が難しい研究（人と社会にかかわるテーマは膨大過ぎて学術的に評価されづらい）であるにもかかわらず、多くの研究が学問の細分化にあわせたアプローチを使用しているため限界がみられることなどを指摘している。なお、中国の社会構造をイメージするための図として「天人合一」の理念を取り入れた「ヒョウタンモデル（ヒョウタンの上部は「官」、下部は「民」の世界を表す。また、「官」と「民」のつなぎ役として「郷紳」が想定されている。ヒョウタン内部では単位としての「家」が流動する。なお、「官」および「家」の内部には本位に結びつく序列が存在する）」を提示している。第一部・第一章では、中国人と中国社会を認識するときに必要なとなる、思考の方法、概念の理解、視座などの問題を扱っている。筆者は欧米の社会学による研究方法を踏まえた上で、中国社会の構築は儒家の社会構築に等しく、儒家の構築した社会理論（欧米型の二項対立とは異なる理論）を、中国社会を考察するための基礎理論とすることを主張している。第一部・第二章では、中国人と中国社会を理解するために必要な研究の視座および方法論として文脈的視座および方法論に立つべきことを提唱している。また概念においては、隠喩の解説の重要性を指摘している（すなわち、「仁」「義」「礼」「孝」「面子」「人情」「関係」のような概念は定義が不可能であり、仮に定義してしまうと誤ったものとなり、定義しない方が中国人にとっては理解しやすいという）。

第二部・第一章では、中国の人間関係についての研究モデルとして、均衡性が中国人の人間関係のネットワークにおいて重要な原則でありながら、今まで論じられてこなかったことを鑑み、構造的均衡モデルの有効性を考察している。関係ネットワークの均衡性の維持はまさしく「人情」を重んずるための一つの策であること、均衡モデルを用いることによって現実の中国人がいかにして戦略的かつ構造的に社会行為を行うかを、事例を用いて説明している。また、均衡モデルはかつて儒家が強調した「礼」の規範の産物でもあることが主張されている。第二部・第二章では、「報」は「人情」、「面子」、「関係」に勝るとも劣らない重要な社会文化的意味をもつ概念でありながら、これら三つの概念ほど研究の蓄積がない。また社会交換理論などの欧米の理論では「報」の道義的側面など中国社会の実情に根ざした概念としての性質や特徴は把握しえない。こうした捉え方からここでは「報」の含意と営みのメカニズムについて考察しており、一般的な意味での交換概念以上の中国的論点を見出している。なお、「報」を一種の閉鎖的交換関係とした場合、中国社会には同時に開放的かつ非交換的とも言える「義」が存在することも指摘している。第二部・第三章では、中国における「関係」を欧米の「社会関係資本」との対比において考察している。その結果として、事例考察も用いながら「関係」は欧米の「社会関係資本」とは概念とは似ている部分もあるものに、多くの違う論点があることを指摘している。また、「中国では、依然として、ほとんどの社会資源や情報が政府官僚の手に握られており、いくら社会团体が形成されていたとしても、そこに価値ある「社会関係資本」が見出せるわけではない。「社会関係資本」は、「関係」をつうじて政府に政府に働きかけてはじめて獲得できるものなのだ（119頁）」と言及している。第二部第四章では、近年のインターネット社会が「関係」の転換をもたらすかどうかの可能

性について考察している。考察に先立って、中国人は「関係」ネットワークは社会組織より優先すべきであり、また契約書など書面上の規定には満足せず、多くの重要な事柄を「関係」をつうじて処理しようとする、さらに「関係」は家族または家族の延長に源を発するものであることを踏まえた上で、「関係」における時間設定の長さが特徴であり、それより自らを固定的な「関係」に位置付け、相手との「関係」を維持・改善・処理しようという傾向があるという「固定的交際モデル」の説明が先ずなされている。その上でインターネットは中国人の社会的ネットワークの強化・拡大をもたらすと同時に、伝統的な「関係」を打破する可能性にも言及している。しかしながら今後は、インターネット上の交際モデルと現実社会の交際モデルとを対照しながら考察していく必要があることを主張している。

第三部・第一章では、「大公平観」が中国社会の成り立ちや営みにおいて、根源、深層を成すものであることが考察されている。すなわち「大公平観」において「公」と「私」は常に総体的で流動的な概念である。「公」は無帰属性であり、「公有」とは「共有」であり、皆が平等に自分のものにできるということにつながる。このことは、共有を成り立たせる共同体の基盤である、血縁、地縁、仲間内との倫理関係に照らすと儲けた利益は道義上、「関係」のネットワークで流通することに結びつき、市場経済化が進む今日においても変わることのない意識であるという。また、「中国人の「大公平観」は、古くから中国人が蜂起、反乱、改革を起こす際の原動力、言い換えれば、中国において大規模な社会変化を引き起こす価値観の源泉となってきた (183 頁)」とも主張している。第三部・第二章では、「人情」と「面子」を重んじる中国社会について、中国が理性と非理性の平衡と調和から成る「情理」社会であるとの想定からその本質について考察している。その中で、中国人の「人情」は個人的付き合いに伴う感情という特殊性に始まり、普遍性に終わが、このような特殊から一般への転換は、純学術的な厳密な論理から導き出すことができないと言及している。また、「情理」においては互惠の最適化が期待されるとの見方から、「礼」や「報」との関係、さらに「権力」の再生産とも関係することを指摘している。なお、「面子」については「人情」との概念的区別が難しく、筆者は「面子」とは、ある人間が「顔」に関わる行為を行った後に、他者から与えられる評価、判定および他者の心の中での序列、心理的地位である (207 頁)」と定義している。「中国人は「情理」社会において、「人情」と「面子」の営みを利用する。それによって、規則、理性、制度を捨てた代わりに、はかりしれないほどの社会的資源、制度を超えた社会的支持や庇護、権力者を後ろ盾にして人を抑えることのできる日常的権威を獲得する (211 頁)」というのがここでの大まかな考察結果である。第三部・第三章では、中国の官僚の作法と技術において「顔」のもつ含意を導くとともに、それが導く相互行為によって作り出される「偏正構造」から「顔」の営みのメカニズムおよび中国人の社会生活や政治生活における意義を、事例を用いつつ考察している。その結果、「偏正構造」と「顔」の営みは、中国のあらゆるレベルにおいて長く、そして広く存在しているとし、「中国とは、一人一人が皆権威を有する社会、誰が権威をもつか、具体的な場面如何によって決まる社会なのである (220 頁)」、「エチアヌ・バラエッシュがかつて歴史の視座から指摘したように、中国は社会構造それ自体が官僚主義的である (222 頁)」、「地方官僚が自らの場で権力の分配と地位の占有を享受し、さらには非制度的な独自の営みのロジックとルールを有している (249 頁)」、「そこが誰の地盤なのか、誰が主人なのかという観念が、誰の地位が高いかという観念よりもはるかに大きい (249 頁)」、「「関係」が中国社会の営みにおいて重要な意味をもつのは、それが「偏位」の者を「正位」へと入らせる力をも

つからである(250頁)」といった点を指摘している。第三部・第四章では、「関係」と「権力」の概念が中国社会を共同体および国家形成の原動力であることを考察しており、その意味で本書のまとめに相当する章といえる。そこでは中国人が理解する「成功」とは、不平等な社会構造のなかで努力して上層に位置することを意味するものであり、中国人と中国社会の「価値体系」と「行動様式」は「関係」および「権力」という二大テーマに集約されるとしている。また、中国社会は、地方の共同体と国家権力がともに体現したものであり、「家本位」でありながら、「官本位」でもあると主張しており、それゆえ共同体と国家を結びつけて考察することによって、なぜ「関係」と「権力」が中国のどの時代にあってもっとも重要なファクターであり続けたのかを理解することができるとしている。なお、1949年以降の30年に中国社会は共同体と国家の関係を一度は打破した(西洋の理論を用いて中国社会を改造しようとした時期)ものの、激しい闘争を生み、結局、共同体と国家の関係の回復期に転換したため、多くの社会現象が、再び「関係」さらには「人情」、「面子」などの概念を用いて解釈できるようになったと言及している。「おわりに」では、現代の社会現象の変化からみて、これまでの考察が十分なものを自問して、筆者は社会の基礎としての「関係」は、表層に生ずる社会の変化からまったく影響を受けない。すなわち、「人情」、「面子」、「関係」、「権力」といった論理は、中国社会の理解において依然として高い説明力を持つとしている。

(三) 評論

本書は、中国人ですら認識・解釈・説明し得ない中国社会および中国人の行動原理について、儒学にも欧米の社会理論にも依らない独自の総体的アプローチによって長年考察してきた研究の集約的成果であり、中国社会の基層を理解する上で貴重な書である。筆者も指摘しているように中国社会および中国人の行動原理を理解することは、本来、本質的かつ不可欠な事項であるにもかかわらず、これまで十分な解明がなされてこなかったことは不思議なことでもある。それだけ長い歴史と多様な文化を培ってきた中国社会の基層を明らかにすることは困難な作業であるのは確かであるが、これも筆者が言うように欧米流の理論的フレームワークによって達成できる類のものでないこともまた明らかである。中国を理解するには中国流の理論的フレームワークが必要であることを明確にしていることも本書の魅力である。中国社会および中国人の行動原理に関して本書における考察が明らかにした特記しうる事項は次の諸点である。第一は、中国社会を「家本位」でありながら「官本位」でもある、地方の共同体と国家権力がともに体現したものとして捉えている点である。彼は「共同体と国家を結びつけて考察してはじめて、我々は、個人や家族の安定しつつも変化に富んだ社会的榮譽、「権力」および勢力がいかんして社会的エネルギーを発揮するのか、またなぜ「関係」と「権力」が中国のどの時代にあってもっとも重要なファクターであり続けたのかを理解することができるだろう」と述べている。そしてそれを基に、中国の社会構造のイメージを、「天人合一」の理念を取り入れた「ヒョウタン・モデル」として表現している。すなわちヒョウタンの上部は「官」、下部は「民」の世界であり、そのつなぎ役として「郷紳」がいる。またヒョウタン内部はダイナミックな変化を伴う世界であり、単位としての「家」が序列の変化とともに流動する。このような中国社会に関する構造的解釈は洞察性が高く、本質を捉えていると評価し得る。第二は、中国社会の構築は儒家の社会構築に等しく、儒家の構築した社会理論(欧米型の二項対立とは異なる理論)を、中国社会を考察するための基礎理論とする

ことを主張している点である。これまで多くの研究が中国社会の構築および中国人の行動原理の根底には儒教があることを指摘してきた。筆者も同様の主張と言えなくもないが、儒家思想の真髄はまさに「関係」の中にあるとし、儒家の道德の本質が「関係」に対する規範体系となっていることを強調している。またその根拠として「忠」、「孝」、「仁」、「義」等のいずれもが「関係」に関する概念であると主張している。これに加え筆者は、「倫」と「礼」が「関係」を規範化し、誘導するための概念であるとしている。このように筆者は中国社会および中国人の行動原理を規定する儒家思想を「関係」の概念を中心に捉え直している。なお、儒家思想においてまだに不明瞭な重要概念といえる「仁」についても、その大きな道理を日常生活という身近な実践の場面で用いるため、その要求水準を「孝」の概念へと下げて用いているとの見解を披露しており、興味深い。第三は、均衡性の仮説を提示していることである。筆者は、三者以上の付き合いが生ずる場合、均衡性こそが、相互行為における最も重要な原則になるとの仮説を提示している。これだけであるとアジア諸国などの人間関係上の原則としてはさほど目新しいようには思えないが、筆者は、自己の「面子」と同時に他人の「面子」を関係ネットワーク内で均衡させようとする均衡モデルを提唱している点で理論性を向上させており、これまでの考察をより一歩進めたものとして評価し得る。第四は、中国は理性と非理性の平衡と調和から成る「情理」社会であり、欧米人とはそもそも物事の見方が異なると主張している点である。それゆえ、中国人の社会および行動原理を西洋の理論および概念で定義および説明することはできないという。そこでは、「人情」と「面子を重視した「関係」の営みが行われるが、中国人の「関係」の発展は生涯にわたる計画であり、欧米におけるような一つの事件や組織構成に限定された計画ではないため、欧米人の人間行動とは異なる結果を導くとしている。第五は、中国は社会構造自体が官僚主義的であるとの認識から、「偏正構造」という概念を用いて中国の社会生活や政治生活において広く行き渡っている「顔」のもつ含意を考察している点である。すなわち、中国においては一人一人が権威を有する社会であり、誰が権威を有しているかはその場面状況によって決まる。誰の地盤か、誰が主人かによって「偏位」の者を「正位」の者に置き換える関係性の変化を有した社会であることを明らかにしている。第六は、中国において共同体および国家形成を図る上での原動力は、「関係」と「権力」の概念が中心となることを主張している点である。中国人における「成功」とは、不平等な社会構造の中で努力して上層に位置することであり、その「価値体系」と「行動様式」は、「関係」および「権力」の二大ファクターに集約されるとしている。また、中国社会は地方の共同体と国家権力が一体となったものであることから、「家本位」と「官本位」とが結びついている。それゆえ中国ではどの時代においても「関係」と「権力」とが最も重要なファクターであり続けているとしている。

こうした考察上の特徴に加えて、方法論上の特徴についても評価しておきたい。筆者は、非常に複雑でダイナミックな中国社会および中国人の行動原理の関係構造は、欧米流の短期的視点を主とした細分化・一般化された学問的アプローチでの考察では無理であるとの見方である。近年、中国においては急速に欧米理論を用いた研究が浸透しており、それゆえ、筆者の研究は長い間、中国の学界からは高い評価が得られないできた。しかしながら、そうした中で自らの研究視座を変えず、理論的枠組み（含む事例研究）を作り上げながら考察を続け、本書をまとめたことは評価に値する。確かにこれまでの多くの先達の研究を拠り所として積み上げた研究ではあるが、より総体的な観点から中国社会および中国人の行動原理の本質を見極めており、関連研究が少ない

中で本書の位置づけは貴重であり、今後、筆者以外にも多くの研究者による研究の取り組みが期待される（例えば、本書内での考察もあるが、中国におけるインターネット社会の急速な浸透が中国社会および中国人の行動原理にいかなる影響を与えていくかは今後の研究課題である）。

なお、本書でも「公」の概念についての考察がなされており、「関係」の概念とも関連性があるので触れておきたい。筆者は、中国人の思考に「公」は根本的に無帰属性あるいは境界線のない事物という見方があるとして「大公平観」仮説を提示している。「大公平観」とは「天動観」と「人道観」とが結びついたものであり、私有権や利益の共有志向、個人主義と集団主義の併存、公有すなわち共有につながることを主張している。これに近い見方は費孝通などの先達も指摘しているが、筆者の場合は単に「公」と「私」との関係性を検討しているだけでなく、それが中国社会と、中国人の心理と行動にどのように影響しているかをダイナミックに考察している点に、これまでの研究とは異なる特徴がある。

筆者がこれまで取り組んできた方法論である欧米の関係諸理論および諸説による研究アプローチと、中国の歴史・文化を基礎とした社会学を主とする多元的研究アプローチとの併行アプローチは、中国社会および中国人の行動の本質的解明において有効であった。あえて質問するとすれば、歴史人口学者かつ家族人類学者であるエマニエル・トッドが世界の諸国との比較において示した「外婚制共同体家族」としての中国という見方に筆者はどのように答えるだろうか。興味深いテーマではあるが今後の研究の拡張を期待したい。いずれにせよ、本書は、緻密さを求める学問的アプローチの圧力にさらされながらも、一貫して問題解明を続けてきた研究の成果であり、中国社会の基層の理解に光明を与えた研究成果である。中国社会および中国人の行動原理にとどまらず、中国における社会・経済・文化の個別分野の理解および研究に際して必読すべき書である。一読を薦める。

(伊藤昭男)